

C O N T E N T S

アジア・太平洋地域HIV陽性者ネットワーク報告 / 日本エイズ学会報告 長期療養シリーズ・第3弾「長期療養生活のヒント」発行！

アジア・太平洋地域HIV陽性者ネットワーク(APN+)報告

男性同性愛者・両性愛者のグループが発足



去る3月、APN+の定期総会がタイ、バンコク市で開催されました。これに先立ち3月3、4日の両日、新たにMSM (men who have sex with men: 男性とセックスをする男性) の活動グループが結成され、第1回会議が開催されました。

欧米ではHIV陽性者ネットワークの活動は男性同性愛者、両性愛者が中心になって進めてきて、これを女性を初めとするさまざまな人たちの支援へと展開してきたのですが、アジアでは性的少数者への偏見や差別が根強く、国によっては未だ男性同性間の性交渉が法律で禁じられている国も少なくありません。つまり同性愛者・両性愛者のHIV陽性者は二重の差別や偏見を受け、当事者として活動することが困難です。このような状況では予防も、治療も、支援活動も上手く行かないのは当然です。特に宗教的な背景から自分がゲイであることを認めることができないイスラム社会や、時には個人より家族の繋がりが重視される日本を含む北東アジアなど、MSMであることがHIV陽性者にとって普通に生き、普通に治療を受けることの大きな障害になっています。会議への参加者も27ヶ国のAPN+への参加国の半分以下10ヶ国、17名と東・東南アジアとオセアニアに限られていたこともアジア地域に於けるMSMの困難な立場をよく現しています。世界的に広く使われているゲイという言葉を使わないのも、このような背景があるからです。さらに国によってはMSMの患者への治療が後回しにされていたり、自分のセクシュアリティを隠して支援や予防の活動に参加せざるをえない状況も珍しくありません。

会議では2010年までにアジアのMSMのHIV陽性者を繋ぎ活動グループを形作ること、それぞれの国のゲイ団体と協力体制を作っていくことが決定されました。このグループのお披露目と参加の呼びかけを目的として、今年、8月にスリランカ・コロンボで開催される(8th ICAAP)第8回アジア太平洋地域国際エイズ会議)でシンポジウムとワークショップの開催を予定しています。

APN+定期総会に参加して

総会に先立ち、2日間、4つのテーマでワークショップが行われました。1日目はスピーカーと組織開発、2日目は治療リテラシー&アドボカシーとプロポーザルの書き方に関するワークショップで、私はスピーカーと治療のファシリテーターのサポートとして参加しました。スピーカー・ワークショップはマニュアルを書いたスーザン・パクストン博士がファシリテーターだったのですが、JANP+のワークショップのほうがより参加者へのきめ細かい配慮がなされているように感じました。いわゆる欧米型の進め方に違和感を抱いている参加者もいるはずで、日本のように言葉の違いだけでなく、どうやってそれを自分たちの文化に合ったものにしていくかということが、これからの重要な課題だと思います。これに関しては、私たち日本は経験をもとに支援できるのではないのでしょうか。

APN+の定期総会では代表・委員が選出され、新しく選出されたベトナムの男性とともに、私が引き続き共同代表を務めることになり、長谷川博史さんも再び顧問に選出されました。APN+のなかで、女性やMSMといった作業部会的なものができ始めているのを見て、ネットワークの活動が盛んになってきていると実感する反面、代表・委員の選出では人材不足(任せられる人がいないあるいは限られている、また一部の人たちを除き、継続的に関わっている人がほとんどいないという現状)が明らかになり、ネットワークのという形態での組織の活動の難しさを感じました。

この総会では、新たな試みとして、APN+が人材を集めてコンサルタント的な仕事を請け負い、その一部をAPN+の収入源とするというサービスの導入が提案されました。GIPA(HIV陽性者の参画拡大)という点ではとても良いのではと思う反面、これによって利益を得る人は一部の英語を話せる人々のみに限定されるのではないかと。また、そもそも何のためにAPN+の基盤を強化していくのか、つまりAPN+の存在意義や目的とは何かという点を改めて考えさせられた一週間でした。

(川名奈央子)

日本エイズ学会報告

HIV陽性者が中心になってシンポジウムを開催！

第20回日本エイズ学会が平成18年11月30日から3日間、東京都千代田区で開催されました。学会というと医療者や専門家などの難しいものという印象がありますが、今回はぶれいす東京会長の池上千寿子さんが学会長であり、しかも「Living Together ～ネットワークを広げ真の連携を創ろう～」をテーマにかかげたものであっただけに、HIV陽性者の顔が見える学会でした。

国際会議ではすでにHIV陽性者を初めとしてHIVに関わるすべての人たちが参加する枠組みが出来ています。それはHIV/エイズの問題は医療・保健分野の専門家に限らず、さまざまな立場から議論し、社会全体が力を合わせて問題に取り組まないと解決できないという理由からです。

これまでの日本エイズ学会は、専門家や研究者でないHIV陽性者にとって参加しにくいものでした。

今回は「医療従事者だけでなくHIV陽性者当事者にも開かれた学会に」という趣旨のもと、早くから陽性者支援団体・当事者団体4団体（社会福祉法人 はばたき福祉事業団、特定非営利活動法人 ぶれいす東京、日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス、特定非営利活動法人 日本慢性疾患セルフマネジメント協会）が協力して準備を進め、日本製薬工業協会の協力のもと、「自ら動き出したHIV陽性者たち ～“自立と社会参加”のための3つのプログラム～」と題したシンポジウムを11月30日日本教育会館において開催しました。

JaNP+からは「HIV陽性者スピーカーの育成・派遣事業」を代表長谷川博史から紹介し、それぞれの団体からも「セルフマネジメントの可能性、展望」大平勝美さん（はばたき福祉事業団）、「ピア・サポートの取り組み“新陽性者”PEER Group Meeting (PGM)」矢島嵩さん（ぶれいす東京PGMコーディネーター）、「慢性疾患セルフマネジメントプログラム」井手康人さん（日本慢性疾患セルフマネジメント協会と、さまざまなHIV陽性者の当事者の活動が紹介されました。ここで紹介されたプログラムは、それぞれに自己管理、ピア・サポート、偏見の解消や啓発とそれぞれに異なる方向性を持つものですが、いずれも同じHIV陽性者が参加できるよう開かれたものです（実施に際しては諸事情から参加が制限されることがあります）。

この当事者が中心になって企画／実施されたシンポジウムはこれまでにない試みで、医療、福祉、保健、教育、NGOなど多方面から注目され、ほぼ満員で熱気にあふれた議論が行われました。

また、このシンポジウムの準備の中でHIV陽性者の学会参加のためのスカラシップ（奨学金制度）が提案され、日本製薬工業界の会員企業を中心に基金が組まれました。その結果、33名のHIV陽性者に参加支援金が提供され、さまざまなセッションでHIV陽性者の発言があり、例年以上に活発な議論が展開されました。これもまたHIV陽性者に開かれた学会を実現した大きな要因でした。

本年度も広島市で開催される第21回日本エイズ学会での実施に向けてすでに準備を初めています。

長期療養シリーズ第3弾発行！

「長期療養生活のヒント～それぞれの経験と予測～」

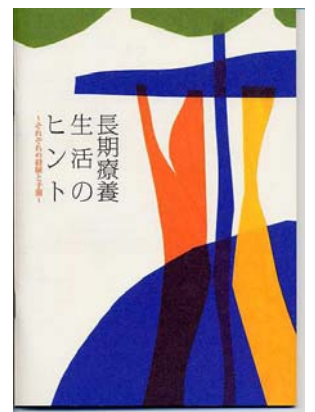
HAART登場から10年。長期療養時代にHIV陽性者はどのような課題に直面しているのでしょうか。

HIV陽性者向けアンケートを行い、まとめて冊子にするという「長期療養シリーズ」（2004年「服薬と生活」、2005年「ストレスとつきあう」）の第3弾として「長期療養生活のヒント」が発行されました。

この冊子は、2006年8月に行った「HIV陽性者のライフマネジメントに関するwebアンケート」の結果をもとに作成したものです。さまざまな問題についてHIV陽性者が、どれくらい「経験」をしていて、それが将来起きることをどれくらい「予測」し、「不安」に感じ、どれくらい「対処自信感」があるかを、16の設問で聞いています。「副作用」「生活習慣病」「薬剤耐性」といったどちらかという医療的なことから、「経済的負担の増加」「周囲への告知」「セックス」といったことまで多岐にわたり取り上げていて、HIV陽性者が直面する幅広い課題が見えてきます。陽性者自身だけでなく多くの支援者にも活用していただける一冊です。

ジャンププラスとぶれいす東京、或いはHIV診療をしている一部医療機関で入手することができます。

- ・ 特定非営利活動法人 ぶれいす東京
<http://www.ptokyo.com/main/hanbaibutu.html>
- ・ 日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス
<http://www.janplus.jp/top.html>



■ 編集後記 ■

第2号のJaNP+ニューズレターは、約1年ぶりの発行となりました。私は服薬を始めて4年くらいになりますが、今回ご紹介しました「長期療養シリーズ」、とても参考になっています。是非手に入れてみてくださいね！

あ、そうそう。JaNP+のホームページも、リニューアルに向けて着々と準備中です。お楽しみに！

(高久陽介)